

逝きし黒川高秀さんへ

二十一回生 大久保 千尋

やはり奇跡は起きてはくれなかった。

ご夫人のお気持ちと同様に、奇跡は必ず起きると信じていた、信じていたかった。
今にも降り出しそうな十二月の空の下、旅立つ黒川さんを無念の思いで見送った。

黒川さんとは終戦の翌々年、小学校の四年生から三年間、同じクラスだった。
頭脳と行動力は抜群で常にクラスのリーダーであり、心優しきガキ大将でもあった。
互いの両親が親しく、誕生日には招待したり、されたりで思い出は尽きない。

若き東谷勝司先生の情熱と黒川さんのリーダーシップのお陰だと思う。クラスはとても良く纏まっていた。先生がご自身の小遣いで買って下さった「ビルマの豎

琴」。先生の朗読に全員が息をひそめ聞き入っていた。蛇口から水が常に漏れていた薄暗い教室で、何度も何度も瞳を潤ませながら全員で物語を共有したアノ時間がたまらなく懐かしい。

同窓会でこの話が出た時、思わず黒川さんと同時に「ミズシマ、イツシヨニ、ニホンニ、カエロウ」と声が出て笑ってしまったが、彼もアノ感動と先生の朗読の声を何十年も耳に残していたのだろう。

俳句を作る野外授業があった。

俳句は本当に苦手である。時間は容赦なく過ぎるばかり。ホトホト困り果てていると黒川さんが「オオクボ、出来た？」度々声を掛けてくれた。

「考えると考えるほど、俳句が逃げて行ってしまおう」と云う様な弱音をはくと、「分かるワ、僕もそうやネン」と妙に共鳴してくれた。彼なりにかなりてこずっていたのだと思う。

「良くないヤロ？」と、それでも五つほど作ったものを見せてくれたが確かにイマイチである。だが五つも作っている事にさすがと感心した。

白紙で提出しようとした時、自分の二首をソット書け

と云ってくれた。

気持ちには嬉しいけどあまりよくない事じゃないかと躊躇する私に「白紙よりはイイヤンカ」と。一句だけ頂戴し、冬にぶい夕日のもとで慌てて書き写した。かじかん指で鉛筆を走らせながら「友情」と云う言葉を始めて認識した瞬間でもあった様に記憶している。

千里山の外れに在る我が家の北側の坂を下って行く時、豊かな自然に恵まれた丘陵が続き子供達の格好の遊び場だった。

そんな我が家の環境を知ってか知らないでか「オオクボ、蝦蟇のいるトコ知らないか?」「毒蛾のいるトコ知らないか」「毒蝮のいるトコ知らないか」等と尋ねられ男の子ってどうして気味の悪い物ばかりに興味があるのだろうと参った事も度々あった。

丁度、そんな頃だったと思う。

上の噴水の方からこちらに登って来る黒川さんを見つけた。

見ると三人ばかりのお供を従え、腰には縄を縛り棒切れを刀の如く差している。

ここで途絶えてしまう。

ただ黒川さんらしくない大真面目な顔とヘンテコリンな勇姿の後ろ姿は昨日の出来事の様懐かしい思い出として臉に残っている。

あれからどれだけの歳月が流れたのだろう。

突然、黒川さんに降りかかってきた事故。

大変に遅まきながらお見舞いに病院に伺った。多分お二人のおもてなしの心遣いだったと思う、車椅子の黒川さんと優しい夫人に迎え入れられ、病室ではなくご自宅に伺ったのではと思うほど明るく和やかな雰囲気の中、とめどもない程話がはずみ、病室には長くて三十分と決まっていたにもかかわらず気が付けば三時間も過ぎていた。

ブザーによる夫人とのコミュニケーションで会話が進められるのであるが、お二人の呼吸が一体化されている夫人は黒川さんそのものであり何の不自由も違和感もなく楽しい時を過ごす事が出来た。

このコミュニケーションが出来る迄の夫人の献身と苦勞と努力は計り知れるものではない。

奇妙な出で立ちに行き先を尋ねると「牛ヶ首池に探検に行く」と大真面目な顔で云った。

「牛ヶ首池」については子供達の間で、今で云う心靈スポットの様な噂が囁かれていた。

池に近づくと俄かに空が曇り激しい雨が降る、水面が荒立ち池に引きずり込まれる、女の泣き声が聞こえてくる、等コワイ話を幾つか聞いていた。

お隣のお兄ちゃん「普通の池だった」とも言っていたけれど。

どうやら黒川さんも噂を聞いていて真偽の程を確かめに行くらしい。

怖さ半分、見たさ半分、実は私も興味深々の場所である。一人で行くのは怖いけれど皆で行けば怖くない。

「一緒に行ってもカマヘン?」と聞くと「カマヘンけど、何んか起きたら必死で逃げる事に決めてるから助けタラヘンぞ」。

お供をするのを止めた。その代わり「牛ヶ首池」で見た事を教えてもらう約束をして、坂を下って行く一行を見送った。お母様がこの事を知ったら彼は叱られるかも知れないナ、とフト思いながら。

その後の報告を聞いたのか聞かなかったのか、記憶は

エレベーターまでお揃いで送って頂いたが、お見舞いに伺ったのではなく、人間とは何か、人間として大切なものは何か、無言の内に教わり頭の下がる思いで一杯であった。事故以前の研究であったロシアのイリザロフ法（複雑骨折などした時、まわりにリング状の器具を付けて、バラバラになった骨を固定してくつつける治療法）の普及の為、夫人とコミュニケーションが取れる様になってからは論文を書き、車椅子で学会に赴き講演をしたと伺い、最後まで医者として学者として貫き通し、それを支え続けた義子夫人、上手く表現できないけれどお二人に惜しみない賛辞を送りたい。

黒川さん貴方は最高にお幸せな方だったと思います。

（イリザロフ法等について心ならずも表現、説明が足りない処はお許しをお願いしたいと思います。）